またやりたい！と思うイベントボランティアとは？
－スポーツに着目した国際比較調査からの知見－

東北大学大学院情報科学研究科　准教授
岡田　彩
AYA OKADA

【プロフィール】なぜ人は、別にやらなくても日々の暮らしに特段支障のない、寄付やボランティア活動をするのだろうか。どのような情報を見ると、そういった行動を起こそうと思うか。このような問題関心のもと、社会学および政策科学の立場から研究に取り組んでいる。PhD（国際公共政策・米国 University of Pittsburgh Graduate School of Public and International Affairs）。同大学 Master of International Development 課程修了、一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了、慶應義塾大学総合政策学部卒。同志社大学政策学部・助教、金沢大学国際基幹教育院・准教授を経て、2019 年より現職。日本社会関係学会・副会長、日本 NPO 学会・理事、特定非営利活動法人 杜の伝言板ゆるる・副代表理事。

１．現代社会にマッチする、短期完結型のボランティア活動

「ボランティア活動をしたい！」と思っても、忙しい日々を送る中で、その時間を確保することが難しいと感じる人は多いだろう。実際、内閣府（2020）の調査では、ボランティア活動への参加の妨げとなることの第１位に、「参加する時間がない」がランクインしている。多忙な毎日の中で、週１回や月１回など、他者のために時間やスキル、エネルギーを定期的に提供することは、そう容易いことではないと考えられる。

そんな現代社会に生きる人々の生活スタイルにマッチしたボランティア活動のあり方として、エピソディック・ボランティア活動（Episodic Volunteering）という形態が注目を集

めている。週末2日間、あるいは10日間だけなど、短期間で完結するボランティア活動である。地域の夏祭りや運動会、マラソン大会や野球の試合、音楽ライブ、災害発生後の被災地支援など、様々な場面において、エピソディック・ボランティア活動は行われている。米国のNancy Macduff が1990年に提唱したこの名称は、「はじまり」と「終わり」が明確であるという点から、「エピソード」という言葉に由来している（Macduff, 1990）。多忙を極める現代人が、時間的な制約を乗り越え、無理なく参加できるボランティアの形態として期待できるだろう。

エピソディック・ボランティア活動は、ボランティアを募る側、すなわち行事やイベントの主催者にとっても、様々なメリットがある。例えば、観客誘導など、同じ作業に従事するアルバイトを雇う必要がなくなることから、運営コストの削減につながる可能性がある。通訳など、専門的なスキルをボランティアが提供してくれることもあるだろう。さらに、ボランティアが活躍することで、周辺のコミュニティからの支援につながったり、参加した人々の満足度を高めることも期待される（Smith et al., 2014）。

短期間で完結するエピソディック・ボランティア活動は、ボランティアをする側にとっても、依頼する側にとっても、win-win な形態ということができるだろう。

２．スポーツイベントでのボランティア活動

エピソディック・ボランティアが活躍する行事やイベントの中でも、特にその存在感が際立つのが、スポーツに関するものである。地域で開催される運動会や野球、サッカー、ゴルフの試合、マラソン大会など、全国各地で行われる数多くの行事やイベントでは、観客の誘導や会場の設営、清掃、アスリートの支援、メディア対応の補助など、多様な場面でボランティアが活躍している。東京2020オリンピック・パラリンピック大会でのボランティアの活躍は、連日報道されており、記憶に残っているという人も多いだろう。

仙台国際ハーフマラソンでは、青いユニフォームのボランティアが随所で活躍
（2022年5月8日、筆者撮影）

こうしたスポーツイベントにおいて、短期完結型のボランティア活動をした人々は、どのような活動に従事し、どのような経験をしたのか。ボランティアをコーディネートしたイベント主催者の対応を、どのように評価したのか。定期的なボランティア活動に比べ、参加へのハードルが低いと考えられる短期完結型のボランティア体験は、オリンピックでも盛んに提唱された「レガシー」、すなわち再びボランティアをしたいという気持ちに、どの程度つながっているのだろうか。

この記事では、エピソディック・ボランティア活動に関する国際比較調査の一環として行われた、スポーツイベントでのボランティア活動に関する分析結果を紹介する（Okada et al., 2021）。この調査は、国際学会 ARNOVA（Association for Research on Nonprofit Organizations and Voluntary Action）に属する世界各国の研究者が企画・実施したもので、主に 2017 年から 2018 年の間、同一の質問紙を用いて、世界 19 カ国でデータが収集された。その中には、スポーツイベントでの短期完結型のボランティア活動を行った回答者が多く含まれており、特に、フィンランド、ガーナ、インド、日本、スイス、タンザニア、米国の 7 カ国を対象とした分析が行われた。その結果、スポーツイベントでのボランティア経験には国によって差異があること、またボランティアの満足度と「またやりたい」という意図は、必ずしも関連していないという、興味深い知見が導かれた。以下では、その詳細を紹介する。

なお、分析の対象となったのは、スポーツイベントで短期完結型ボランティアを行った、1,004 名である。男女比は概ね半々であったが（男性 49%、女性 51%）、年齢は 18 歳から 24 歳が 23%、45 歳から 54 歳が 21%で最も多かった。対象者の 50%以上が、週 1 あるいは月 1 など、定期的な（periodic）ボランティア活動を行っておらず、短期完結型であるからこそ、ボランティア活動に従事できた層であると推測された。

３．国による活動内容の違い

国による違いが顕著に現れたのが、ボランティアの活動内容に関する項目である。例えば、活動時間数を見ると、米国では 10 時間以上が 92%、フィンランドでは 70%、スイスでは 66%であったのに対し、日本では 5 時間以下が 57%、ガーナでは 48%を占めており、同じスポーツイベントでの短期完結型ボランティアと言えども、差があることが浮かび上がった。

個人でボランティア活動に参加したのか、あるいはグループとして参加したのかという点では、フィンランドの 64%、スイスの 82%、米国の 81%が個人で参加したのに対し、インドでは 59%、日本では 45%、タンザニアでは 57%が、グループの一員として参加していた。

与えられた役割という点でも、国による違いがみられた（表 1）。全体で見ると、アスリートや観客と直接接する立場で活動したボランティアが全体の 46%を占めていたが、米国

表１．ボランティアが果たした役割

	フィンランド	ガーナ	インド	日本	スイス	タンザニア	米国
ボランティア・リーダー	8%	23%	45%	15%	18%	10%	36%
イベント前の準備	32%	25%	63%	46%	29%	11%	37%
アスリート・参加者と直接接する	77%	30%	35%	52%	31%	65%	30%
イベント後の清掃	11%	17%	22%	32%	23%	14%	12%
広報・マーケティング	9%	40%	28%	6%	5%	0%	28%
オンラインでの活動	3%	19%	27%	2%	5%	0%	50%
資金集め（ファンドレイジング）	1%	23%	0%	3%	0%	0%	24%
専門化や主催者の補助	11%	29%	0%	19%	28%	0%	18%

とガーナは、他の国に比べ、ボランティアが務めた役割の多様性が高かった。日本では、イベント前の準備やイベント後の清掃に従事するボランティアが多かったことに比べ、ガーナでは、広報・マーケティングや資金集めに従事した人も多く見られた。米国では、オンラインでのボランティア活動も活発に行われたことが分かった。

さらに、与えられた役割を完遂したかどうかを尋ねると、フィンランド、ガーナ、日本、スイス、米国では、回答者の 95%以上が、計画通り与えられた役割を完了していた。一方、タンザニアは 86%、インドは 73%にとどまっていた。この点を理解するに当たり、インドのスポーツボランティアには、イベント主催者との個人的な関係によって、活動時間を延長したり、短くしたりする傾向があるとする先行研究が参考になりそうである（Chakravarti, 2018）。

４．大規模イベントでは、スムーズなボランティア活動を経験

こうした国による差異は、文化的な影響も垣間見えるものの、ボランティアが活動したイベントの規模や性質にも左右されると考えられる。今回のデータでは、米国、フィンランド、スイスに、全国規模のスポーツイベントで短期完結型のボランティア活動をした人々の回答が多く含まれていたことから、規模に注目した傾向も浮かび上がってきた。

大規模なイベントの場合、主催者がボランティアをコーディネートする経験を積み重ねてきていることが推測される。毎年開催されるマラソン大会や 4 年に 1 回開催される世界大会などを思い浮かべてみると、ボランティアの役割が明確に定められ、提供する研修の内容、ボランティアへの連絡のあり方、問い合わせへの対応方法、ボランティア同士の交流を促す方法など、経験に基づいた方法がある程度定まっている場合が多い。

確かに、大規模イベントでのボランティアが多かった米国、フィンランド、スイスの回答を見ると、ボランティアが、主催者との関係において、非常にスムーズな経験をしたことが浮かび上がってきた。例えば、「イベントに関する事務連絡（活動内容や時間）は良く整理されていた」と感じたボランティアは、米国で 80.6%と高く、続いてフィンランド（60.2%）、スイス（51.5%）であった（図 1）。一方、小規模なイベントでのボランティア経験者が含まれた日本やインドは、良く整理されていなかったと感じる回答が 3 割を占めていた。

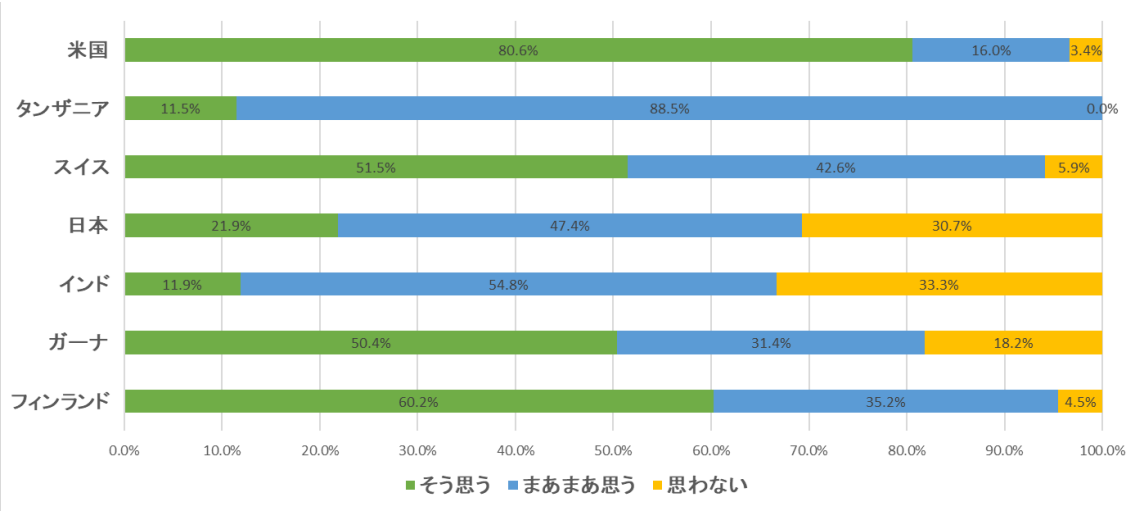

図１．イベントに関する事務連絡（活動内容や時間など）は良く整理されていた

同様の傾向は、「イベントの事前研修・説明は十分なものだった」という回答にも見られた（図 2)。「そう思う」「まあまあ思う」とする回答の割合は、タンザニアで最も多く、続いてフィンランド、米国、スイスと続いた。日本とインドでは、3 割以上が「思わない」を選択しており、研修や説明が不十分であると感じたボランティアが一定数いたことが明らかとなった。

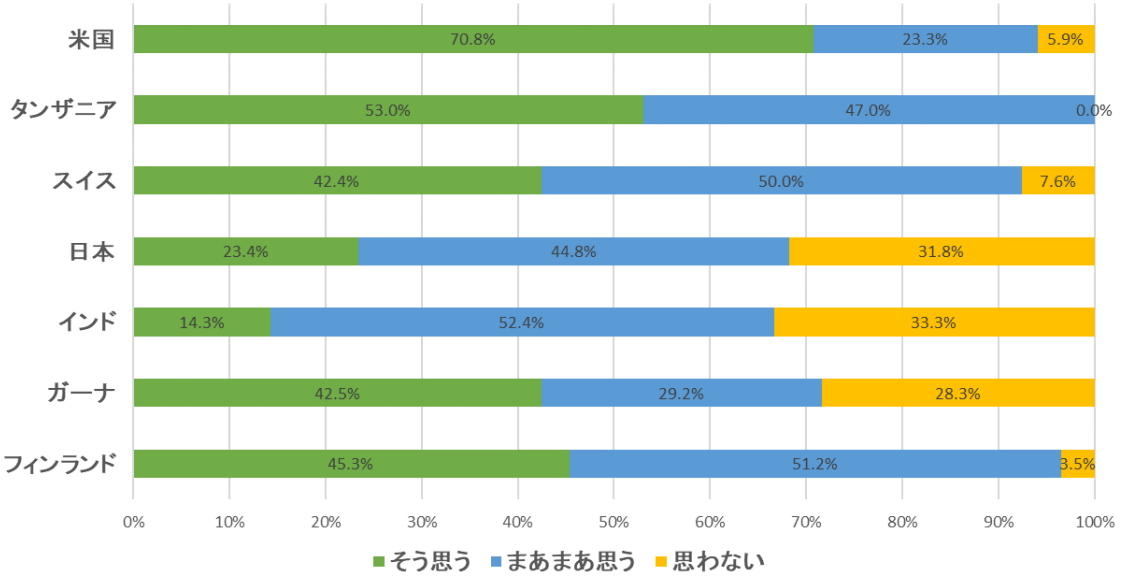

図２．イベントの事前研修・説明は十分なものだった

大規模なスポーツイベントをはじめ、ボランティアへの対応が整理整頓された環境では、感謝の気持ちを示すことも、必要なこととして予め整えられている可能性が高い。「活動に対して感謝されたと感じた」という設問では、米国、フィンランド、スイスにおいて「そう思う」という回答が 7 割以上を占めた一方、日本、インド、ガーナでは、感謝を感じなかっ

たボランティアが一定の割合確認された（図３）。

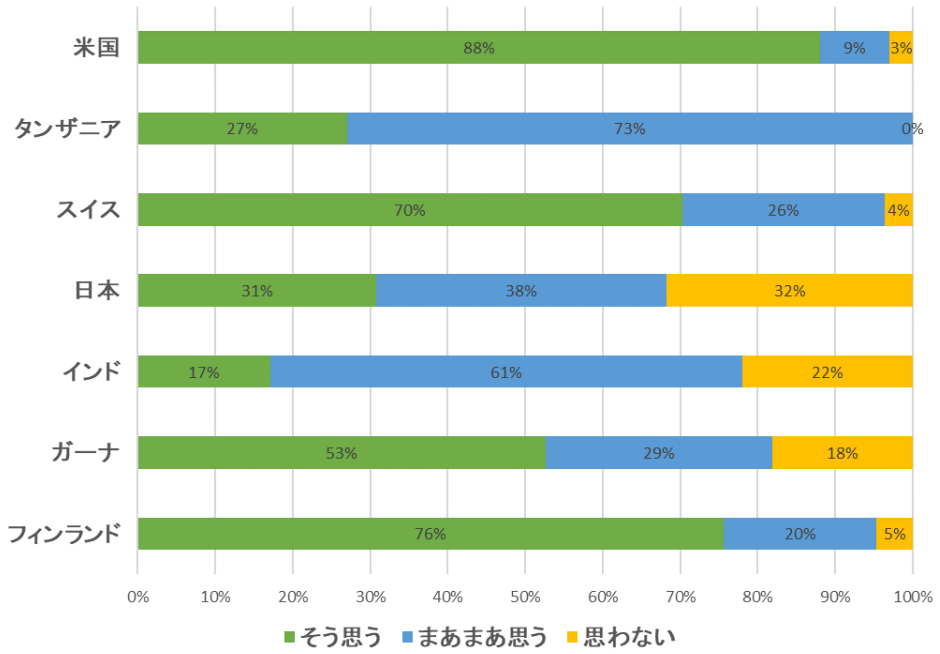

図 3. 活動に対して感謝されたと感じた

他者と共に活動することに満足するかどうかという点においても、大規模なスポーツイベントで活動した人の方が、「そう思う」と回答する傾向が見られた（図４）。主催者のコーディネートがスムーズに行われた結果、他のボランティアや、参加者とのやり取りに困難が生じにくかったことが推測される。一方、日本とインドにおいて、他者と共に活動することに満足したと感じたボランティアは、相対的に少なかったようである。

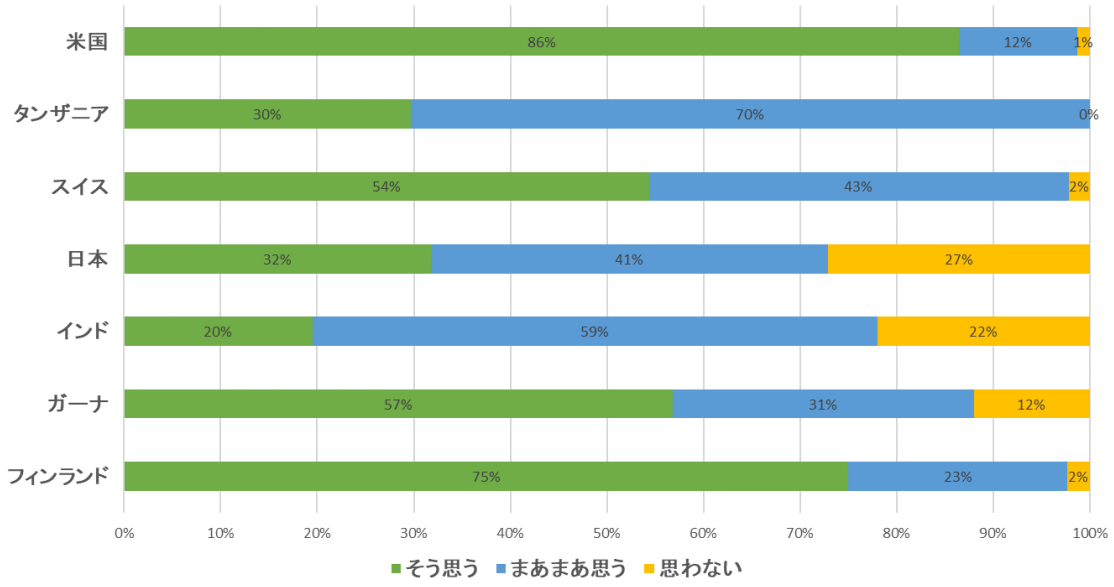

図４．他者と共に活動することに満足した

５．「満足」と「またやりたい」のギャップ

全体的な満足度という観点からも、大規模なスポーツイベントでのボランティアの方が高いという傾向が見られた（図５）。米国、スイス、フィンランドでの満足度が総じて高かった一方、日本やインドでは、25%以上が「あまり良くなかった」「全然良くなかった」を選択した。活動がスムーズではなかったり、混乱が生じたなど、何らかのストレスを伴う経験となったことが推測される。

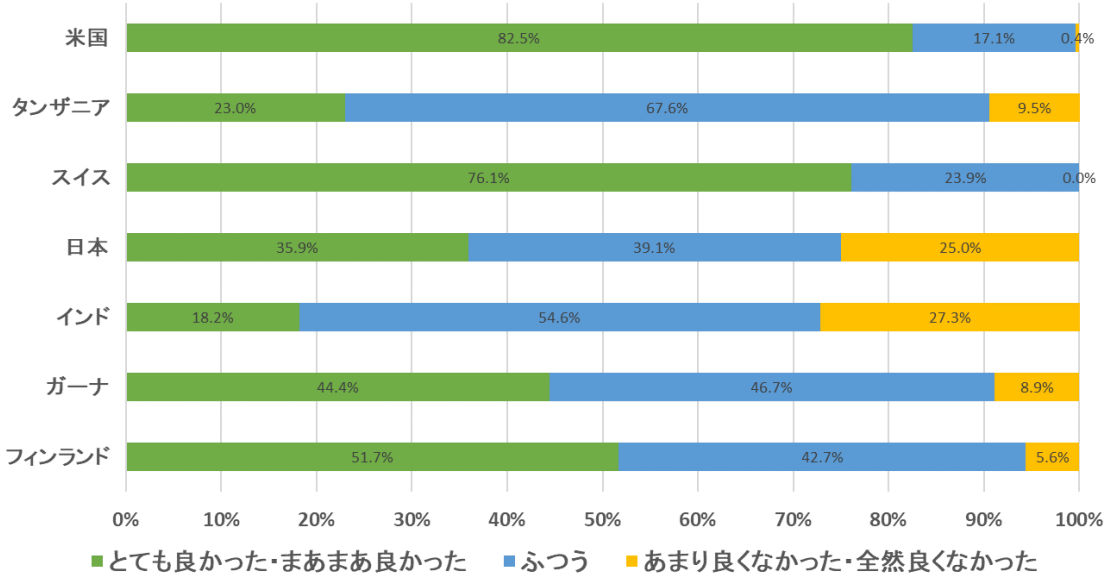

図５．全体的な満足度

直感的に考えると、満足の行くボランティア体験をした人は、再び同じようなイベントでボランティアをしたいと考えるのではないかと予測される。しかし、この調査では、必ずしもその傾向が当てはまらないという、興味深い知見が浮かび上がってきた。

類似のイベントで再びボランティアをしたいかどうかを尋ねたところ、タンザニア、米国、スイス、ガーナで「またやりたい」が多く、満足度が比較的低かった日本でも、約 70%のボランティアが再び活動する意図を持ったことが明らかとなった（図６）。スポーツイベントでの満足度と、再度活動する意欲を持つかどうかには、ギャップがあることが示唆される。

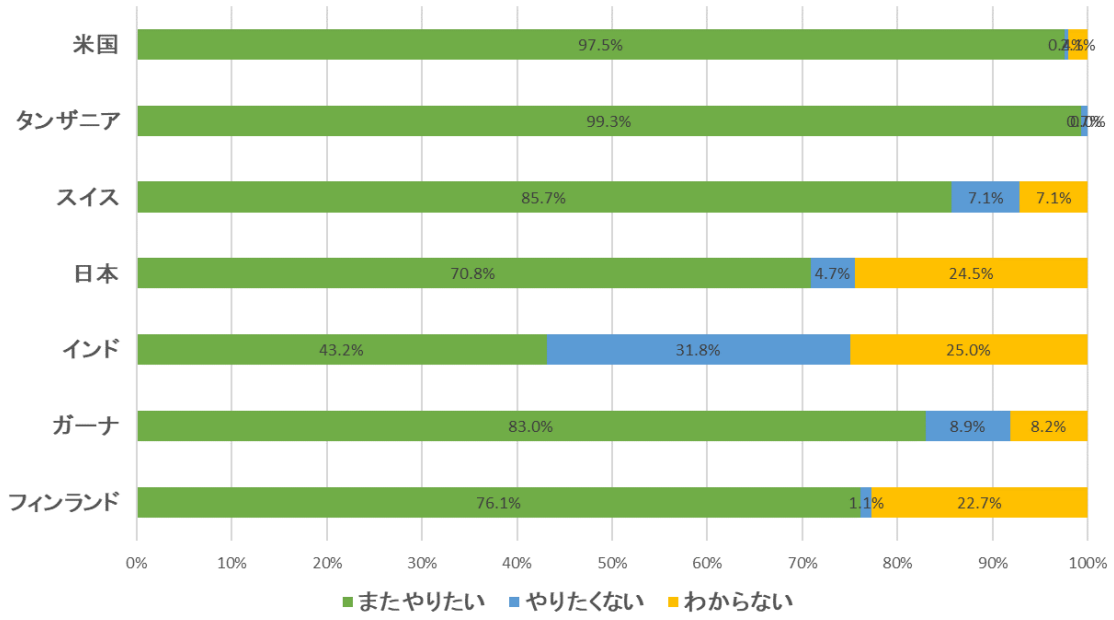

図６．類似のイベントで再度ボランティア活動をしたいか

この点をさらに探求するために、統計的な推定（順序ロジットモデル）を行ったところ、高い満足度に影響したポイントとして、「イベントの事前研修・説明」は十分なものだった」「主催団体からの連絡はスムーズだった」「適切に感謝された」「他者と共に活動することに満足した」が特定された。一方、「またやりたい」という意図に影響したのは、「他者と一緒に活動して満足した」という点のみであった。大規模スポーツイベントのように、丁寧なコーディネーションのもとでボランティアをした人は、雑なマネージメントのもとでボランティアした人に比べて、そのイベントでのボランティア体験の満足度は高くなるが、「またやりたい」という意図は必ずしも生まれない、と言えそうである。

この結果は、どのように解釈できるだろうか。整理整頓された環境で活動することは、わずらわしさが少なく、スムーズな経験となると予測される。自分が担当すべき役割が明確であり、必要な研修も提供されれば、安心して活動に従事できるだろう。分からないことは、きちんと問い合わせる手段が提供され、ボランティアとしての活動への感謝も、折に触れて示される可能性が高い。

一方、小規模なイベントなど、主催者側が提供する環境が粗い場合、ボランティアがストレスを感じる状況は多くなりそうである。自分がすべきタスクが曖昧で、何が求められているのか、どう動くべきかが分からない場合もあるかもしれない。しかし、そのような混沌とした環境こそが、ボランティア自身が創意工夫しながら、物事を成し遂げたり、他の人と協力して問題を解決するチャンスを生み出すのではないか（Taks et al., 2015）。ストレスフルな状況に置かれるからこそ、自分が必要とされているという感覚が生まれ、似たようなイベントで「またやりたい」という気持ちを生み出すのではないか（Maas et al., 2021）。そのよ

うな解釈も可能かもしれない。

6．試行錯誤してこそ、ボランティア？！

整理整頓された環境におけるストレスの少ないボランティア体験が、「またやりたい！」という意図に必ずしもつながっていないという知見は、筆者らにとっても、驚きの結果であった。誰かが敷いたレールに乗って活動するよりも、脇道に逸れつつ、試行錯誤しながら、イベントを支えていく。それこそが、仕事ではない、ボランティアの面白さなのかもしれない。

参考文献

Chakravarti, P. (2018). India. In Hallmann, K. and Fairley S. (eds.). *Sports Volunteers Around the Globe: Meaning and Understanding of Volunteering and its Societal Impact*. Cham: Springer Nature Switzerland.

Maas, S. A., Meijs, L. C. P. M., & Brudney, J. L. (2021). Designing "National day of service" projects to promote volunteer job satisfaction. *Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly*, 50(4), 866–888.

MacDuff, N. (1990). Episodic Volunteers: Reality for the Future. *Voluntary Action Leadership* (Spring), 15-17.

内閣府（2020）「令和元年度　市民の社会貢献に関する実態調査　報告書」
https://www.npo-homepage.go.jp/uploads/r-1_houkokusyo.pdf

Okada, A., Ishida, Y., Yamauchi, N., Grönlund, H., Zhang, C. and Krasnopolskaya, I. (2021). Episodic Volunteering in Sport Events: A Seven-Country Analysis. *VOLUNTAS: International Journal of Voluntary and Nonprofit Organizations*. Online First.

Smith, K.A., Baum, T., Holmes, K. and Lockstone-Binney, L., (2014). Introduction to Event Volunteering. Chapter One in Smith, K.A., Lockstone-Binney, L., Holmes, K., and Baum, T. (Eds.). *Event Volunteering: International Perspectives on the Event Volunteering Perspectives*. Abingdon, Oxon: Routledge.

Taks, M., Chalip, L., & Green, B. C. (2015). Impacts and Strategic Outcomes from Non-mega Sport Events for Local Communities. *European Sport Management Quarterly*, 15(1), 1–6.